

今週の為替相場見通し(2025年3月24日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		148.18 ~ 150.15	149.32	147.00 ~ 151.00
ユーロ	(ドル)		1.0795 ~ 1.0955	1.0810	1.0700 ~ 1.0900
(1ユーロ=)	(円)		160.73 ~ 164.18	161.39	160.00 ~ 163.00
英ポンド	(ドル)		1.2886 ~ 1.3015	1.2915	1.2600 ~ 1.3100
(1英ポンド=)	(円)	*	191.97 ~ 194.91	192.88	185.00 ~ 195.00
豪ドル	(ドル)		0.6258 ~ 0.6391	0.6273	0.6200 ~ 0.6400
(1豪ドル=)	(円)	*	93.16 ~ 95.75	93.64	90.00 ~ 95.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

(1)今週の予想レンジ: 147.00 ~ 151.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

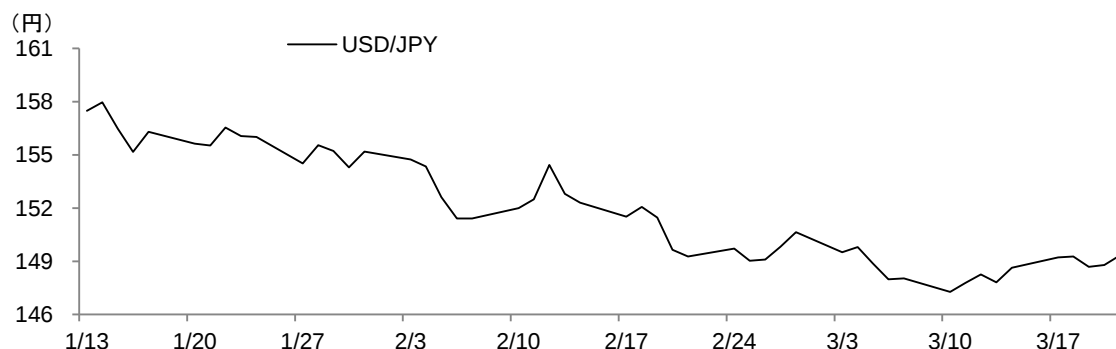
先週のドル/円は149円を挟んで上下に振れる展開となった。週初17日、148.58円でオープンしたドル/円は公表された米2月小売売上高が強弱入り混じる結果となるも、米株が上昇する動きに149円台前半へ上昇した。18日、ドル/円は米金利上昇を背景に150円を目指す展開。海外時間は翌日に日銀金融政策決定会合を控えて円売り優勢となり150円台手前まで上昇も、その後は米株安が嫌気され149円台前半へ下落した。19日、日銀金融政策決定会合ではコンセンサス通り政策金利の据え置きを発表後、149円台半ばを中心に方向感なく推移。植田日銀総裁会見では賃金データはオントラックの範囲内でやや強めとして海外由来の不確実性は急速に高まっているとした。同時に、トルコ政情不安に伴うリスクオフに149円台前半に反落した。その後は徐々に値を戻し、一時週高値となる150.15円を付けるも、FOMCの据え置き結果公表とパウエルFRB議長会見にて経済の不確実性が意識され米金利が低下すると148円台後半に急落した。20日、ドル/円は本邦祝日で薄商いの中でドル売り地合いが継続し、148円台前半に続落。海外時間は、米経済指標の堅調な結果を受けた米金利上昇を支えに148円台後半に反発した。21日、ドル/円は日本株が底堅く推移する中、円売り優勢となった。海外時間入り後は149円を挟んで推移し、結局149.32円で越週した。

今週のドル/円は、日・米両中銀会合を通過したものの、引き続き米国由来のリセッションや米国の通商政策を巡る不確実性の高さに、センチメントが改善されていない為、上値重い展開を予想する。先週開催されたFOMCでは成長率見通しが引き下げられ、インフレ見通しが引き上げられており、スタグフレーションの懸念が煽られる状況も、米関税など不確実性の大きさが意識されて動意は出なかった。日銀会合においても各国の通商政策に影響を受けた海外経済の不確実性に言及がなされた。もっとも、植田日銀総裁は次回会合までにある程度その不確実性を消化できる可能性に言及しており、目下4月2日に発動予定の相互関税等を巡って、神経質な地合いが続きそう。相互関税は一部の国・地域除外などの報道も出ており、引き続きヘッドラインを注視したい。24日(月)に米3月製造業・非製造業PMI、25日(火)にコンファレンスボード消費者信頼感、28日(金)に米3月PCEコアデフレーターが公表予定。直近は景況感指数や消費者センチメントなどソフトデータの悪化が意識されており、市場予想を下振れた際のリスクオフ的な値動きが強まる場合により警戒したい。その他、25日(火)に日銀金融政策決定会合議事要旨(1月会合分)、28日(木)日銀金融政策決定会合主な意見(3月会合分)が予定されている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(3/17~3/21)の値動き:

安値 148.18 円 高値 150.15 円 終値 149.32 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 島 欣生

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.0900 160.00 ~ 163.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、18日に年初来高値を更新し昨年10月以来の水準まで上昇するも、その後は下落する展開となった。17日はEGB利回りが低下する中ではあったものの、欧米株の上昇が支えとなり、1.0880近辺から1.0930近辺まで上昇。18日は欧州株の上昇に連れて1.0920近辺から1.0955まで続伸し昨年10月以来の高値水準をつけた。その後公表された独3月ZEW景気期待指数は51.6と市場予想(48.3)を上回り、前月(26.0)から大幅な改善となったものの、ユーロ買いは続かず一時1.0900を割り込んだ。しかし、独連邦議会下院で財政改革パッケージが可決されたほか、ウクライナ部分停戦合意も好感され、1.0950近辺まで再度上昇となった。19日は欧州時間入りにリスクオフで1.0950近辺から1.0870近辺まで下落後、NY時間にかけては1.0860近辺まで続落となったが、FOMC 後には米金利低下によるドル売りが下支えとなり1.0910近辺まで反発となった。20日は欧米株安によるリスクオフが重しとなり、EGB利回りの低下と共にNY時間にかけて1.0810近辺へ下落した後、欧米株の下落が一服するとEGB利回りの上昇と共に1.0860近辺まで小反発。21日は週央からのユーロ売りの流れが継続し、アジア時間に1.0820近辺まで下落し、NY時間には米金利の上昇が重しとなり、一時3月7日以来の安値となる1.0800割れをつけた。

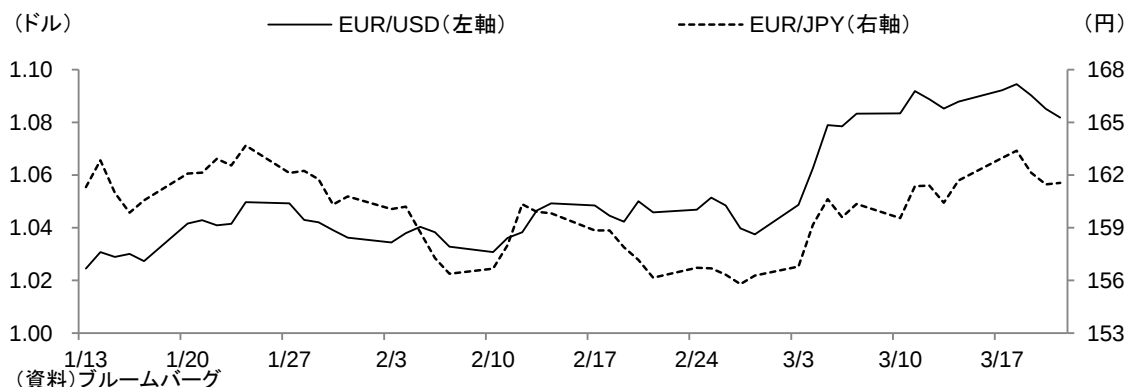
今週のユーロ相場は軟調な展開を想定する。先週は前述の通り独連邦議会下院で防衛・安全保障関連支出に関してGDP比1%を超える分につき憲法で規定される債務上限の対象から外すことや、予算外の5,000 億ユーロのインフラ基金設立を含む財政改革パッケージが可決されたが、先々週までに市場織り込みが相応に進んでいたと見られ、独国債利回りの上昇は一服し14日に10年債利回りが2.94%近辺をつけた後、2.75%近辺まで低下している。一方でFOMC後に米金利は低下で反応しているものの、トランプ米政権の関税引き上げによるインフレへの影響を見極める段階にある中で米金利の低下がラリーする展開は想定しにくく、欧米金利差の縮小を拠り所としたユーロ/ドルの上昇はピークをつけたと見ている。水準面では200日移動平均が位置する1.07程度を目先の下値目途と見ており、24日(月)発表の欧米の3月PMIや28日(金)発表の米2月PCEの結果次第でユーロ売りが続くようであれば、2月につけた安値と先週つけた高値の半値戻しとなる1.05台半ばが視野に入る。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/17~3/21)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0795 高値 1.0955 終値 1.0810

(対円) 安値 160.73 高値 164.18 終値 161.39



3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.2600 ~ 1.3100 185.00 ~ 195.00 円

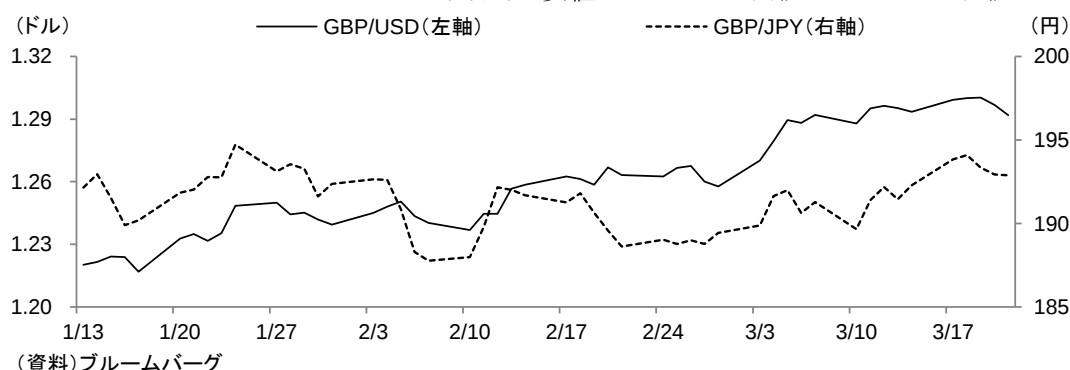
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は高水準を維持するも大台1.3前後で上値重く、結局同水準で週末に渡った。週初は米長期金利がスタグフレーションを意識したフラットナーポジショニングによって下落する中、ドル売りとなり英ポンドは上昇。翌18日は独財政制限緩和案の下院投票を控えて欧州株式指数や独金利が上昇する中、ユーロは可決を織り込む利益確定売りか、徐々に値を切り下げた。英ポンドもユーロの動きにつられて大台1.3前後でもみ合うも明確に上昇できず。19日は一時トルコのイスタンブール市長拘束のヘッドラインで売られるも、午後のFOMCにて米国債のランオフペース減速が発表されたことが事実上QT終了を意識させドル売りとなり、ポンドは力強く上昇した。20日は、FOMCを消化しポジションの巻き戻しでドル買いとなる中、英1月雇用統計とBOE政策金利発表が市場予想通りの内容で発表される。ただ市場がBOEの据え置き7対利下げ2を予想していたのに対し、実際には据え置き8対利下げ1の表割れとなったことからポンドは反発した。

今週の英ポンドは対ドルで下落を予想する。前週は独財政制限緩和案の織り込みが進み、独金利や独金利の上昇を伴ってユーロがけん引する形で英ポンドもつられて上昇する展開が引き続き見られた。一方で議会での承認が進むに伴い材料として消化され、徐々に現実的な債券発行のタイミング等が意識される中で利益確定売り等ポジションの巻き戻しが起こる展開が考えられる。特に未だ米関税は不透明感が高く、急激なドル売りは巻き戻されやすいように思う。経済指標では24日(月)に米3月PMI速報値、27日(木)に米2月PCEが発表される。不透明感を強めている米経済のダウンサイドリスクについて、センチメントを左右する意味で米指標が引き続き下振れしないか注視したい。英指標では26日(水)に英2月CPIが発表される。先週、BOEは若干のタカ派的表割れで据え置きとなったが、数値上高止まりするサービスインフレも引き続き注視したい。また26日(水)にはリーズ英財務相が春季予算案を発表する予定で、厳しい財政による増税や緊縮から英債券利回り主導の動きが出る可能性もある。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/17~3/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.2886 高値 1.3015 終値 1.2915
(対円) 安値 191.97 高値 194.91 終値 192.88



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 范 哲遠

(1) 今週の予想レンジ: 0.6200 ~ 0.6400 90.00 ~ 95.00 円

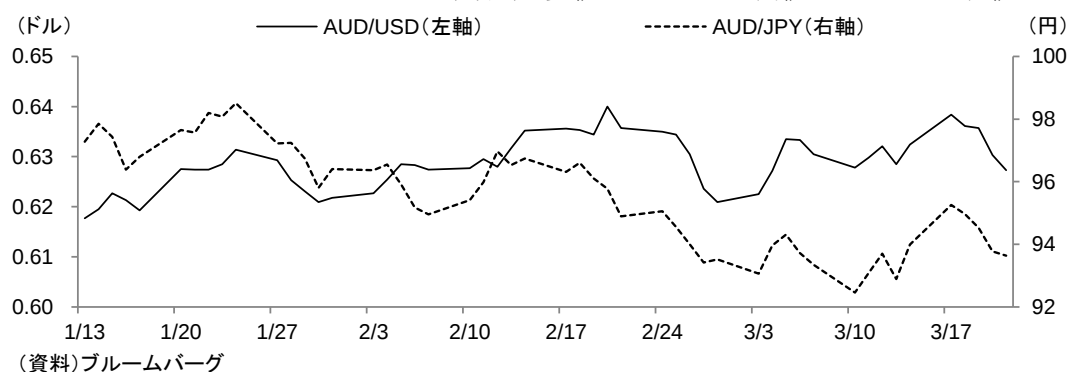
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル/ドル相場は週央に上昇も週終わりでみると小幅な下落で着地。週初17日、豪ドル/ドルは0.6325で取引を開始。米2月小売売上高の結果を受けた米金利の低下とともにドル売りが優勢。この流れから豪ドルはNY引けにかけて上値を追う展開。18日、アジア株が堅調推移する中、豪ドル/ドルは週高値となる0.6391まで上昇。その後、発表された米2月輸入物価指数や米2月住宅着工件数が予想を上振れたことを受けドルが買いで反応すると、豪ドル/ドルは反落。大型ハイテク株を中心に米株が下落幅を拡大する中、豪ドルは上値重く推移。19日、FOMCを控えてアジア時間は小動き。FOMCは2会合連続で政策金利の据え置きを決定。ドットチャートでは予測中央値で年内▲50bpの利下げが引き続き示された。タカ派的な内容になることを警戒しFOMC前まで買い進まれていたドルは、年内▲50bpの利下げ予想が維持されたことを受けて反落。この流れから豪ドル/ドルはFOMC前に一時0.6321近辺まで下落していたが、FOMC後は買い戻しの動きが入り0.6360近辺まで上昇して引けた。20日、豪2月雇用統計が予想外に弱い結果となったことを受けて豪ドル売りが優勢に。トランプ米関税を巡る不透明感が続く中、発表された米経済指標は底堅く、米株は欧米時間以降、売り買い交錯する展開。リスクセンチメントの悪化を背景にドルが幅広い通貨に対して上昇する中、豪ドル/ドルは一時週安値となる0.6258まで下落した。21日、週末を前に上昇する米金利を横目に豪ドルは売られる展開。結局0.6273で越週した。

今週の豪ドルは上値重く推移するものと予想。今週注目の経済指標は26日(水)に発表される豪2月消費者物価指数(CPI)となっている。市場予想は前月横ばいの前年比+2.5%。当該指標は2024年8月以降、RBAが掲げるインフレ目標のレンジ内で収束しており、今回も予想通りの結果がメインシナリオ。先週公表された豪2月雇用統計の結果がネガティブサプライズだったこともあり、5月の豪準備銀行(RBA)理事会での追加利下げの織り込みが現在7割弱まで織り込まれている。実際弱い数字が発表されると5月での利下げ期待がさらに高まり、市場は豪ドル売りで反応するだろう。また、足許は経済指標の結果以上にトランプ米大統領による関税政策の動向が相場に影響している。各国の中央銀行関係者が言及しているようにトランプ米大統領の下での不確実性は続く状況下、リスク資産が売られるリスクオフ局面では豪ドルは売られやすいだろう。トランプ米大統領は4月2日に「相互関税」を公表する予定であり、引き続き動向には注意が必要か。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/17~3/21)の値動き: (対ドル) 安値 0.6258 高値 0.6391 終値 0.6273
(対円) 安値 93.16 高値 95.75 終値 93.64



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。